



まちづくり

市民のニーズに応えた 資源回収は大盛況

岐阜県可児市・可児市生活学校



発泡スチロール
食品トレイ





日溜りがほのかに暖かい二月の朝八時、黄色いジャンパーを着たメンバー二十名ほどが、すばやく大きな網や袋、交通整理用のコーンを取りだし、会場の設営にとりかかる。しかし、すでに車で乗りつけ、袋を両手に抱えた市民が幾人もやってきている。たしか午前九時開始だったはずだが…。

ここ岐阜県可児市にある「市民リサイクルステーション」では、毎月第四日曜日の午前九時から十一時に市総合会館分室（JR可児駅西側の駐車場で、資源回収が行われている。品目はビン四種、缶、ペットボトル、発泡スチロールや、新聞、雑誌、ダンボール等の紙製品、レジ袋などの十五品目にのぼる。

この市民リサイクルステーションを運営しているのが可児市生活学校（代表・間瀬淳さん）。平成十一年四月の開設以来、この三月で丸三年を迎える。

それにしても市民が続々と資源ごみを持ってくる。はじめて見る者には圧倒される慌ただしさだが、リサイクル指導員でもあるメンバーは慣れたもの。次々と持ちこまれる資源ごみの分別を市民にアドバイスし、袋にまとめ、山積みにしていく。そしてそれぞれの品目の回収業者に引き渡し作業は終了となる。今日は約四百人の市民が訪れた。目まぐるしい三時間だったが、メンバーに言わせると「いやー、今日は楽な日



だったわー」とのこと。時期的には、やはり七、八月、それと十二月が回収量が多くなるという。実は可見市では、平成十年六月から、八種の分別によるステーション回収を行っている。ところが、市がアンケート調査を実施したところ、市民からは、「自治会に加入していないとごみが出しにくい」「リサイクル対象品目を一括して出したい」「働いているので、日曜日に出せる資源回収の場所が欲しい」などの要望が聞かれた。

このような市民の要望に応えるため、市民リサイクルステーションが開設された。そしてその運営には、可見市生活学校があたることになった。同校が運営を任されることになった背景には、これまでの河川環境調査や生ごみの減量活動、市役所の中に「生活学校の店」を設けて環境に良い商品の販売を行うなど、長年にわたる活動の実績があった。さらに、行政に一方的に要求するのではなく、お互いの立場を認め合い、同校が行政と市民との橋渡し役を担ってきたことが大きいといえる。

当初、間瀬さんには、「資源ごみの量が少なかったら、回収業者に申し訳ないなあ」という心配があった。そこで資源回収を知らせるビラを、一千枚配布し、宣伝にも務めた。その結果、今では、訪れる人からは、「日曜の買い物の前に寄っている」などの声も聞かれ、すっかり定



着している。このような方式が、地域単位での資源回収において不便を感じていた市民のニーズと合致し、支持されているといえよう。回収量は平成十一年度が百九十六トン、平成十二年が二百四十七トン、平成十三年が二百三十九トン（一月の回収の時点）と、年々増えている。

午後からは、環境課や生ごみ減量研究施設の職員を招いた研究報告会が行われた。「三年たつて運営にも慣れてきたが、車の誘導の点では課題も多い」などと報告がされ、缶詰のフタの分類などで意見交換がなされた。また、環境課からは、ごみ減量を目指して生ごみを堆肥化して畑に利用した様子が紹介された。

副代表の鬼頭さんは、「メンバーの中には、いやいや来ている人は誰もいない。勉強会とはちがって、話をしながら楽しく、人の役に立てることができることがうれしい」と、活動の意義を強調する。

また、古紙の売り上げは、同生活学校の収入となる。そのお金で、メンバーがホームヘルパーの資格を取得するなど、しっかりと「果実」も取っている。間瀬さんは「メンバーとともに、実際に現場で活動するなかで、市民の本当の声を聞くことができる。その声を行政に届けたい」と、力強く抱負を語ってくれた。

■連絡先 可児市生活学校 間瀬淳さん

TEL 〇五七四 一六五 一七〇八八